

166  
768

石見青牟論

石見青年論 35

(一)

石見青年論自叙

吾人曩キニ將來ノ石見中學校タル最愛ナル

二尋常中學校ヲ去リテヨリ以來石見社會ノ現狀ヲ觀

察スルニ感慨ノ念頻リニ至リ勃々トシテ禁スル能ハ

ス遂ニ卒然トシテ筆ヲ執リ私見ノ一班ヲ録シ名ケテ

石見青年論トス期スル所ハ親愛ナル新石見繼續ノ

重任者ト共ニ無用ノ學者トナルコトナク有用ノ事業

家トナリ以テ石見社會革新ノ實ヲ舉ケントスルニア

リ議論粗雜秩序不整讀ムニ堪ヘサルカ如キモハ一

ニ是レ著者カ面乳臭ノ書生ニシテ識見極メテ淺



薄大ルヲ致ス所ナリ冀クハ縊カニ幽谷ヲ出テシ雖鶯ノ其音猶ホ遊フルヲ想シ只一片ノ赤心ノ存スル所ヲ諒セヨ

明治廿八年三月

大谷暉男識

櫻花將ニ發カントハ黃鳥喬木ニ遷ル時

石見青年論目次

石見青年論目次

- 第一章 緒論
- 第二章 石見青年と石見
- 第三章 石見教育不振の原因を論じて石見青年の覺悟を促す(上)
- 第四章 石見教育不振の原因を論じて石見青年の覺悟を促す(下)
- 第五章 石見人の最大弱點を論じて石見青年に及ぶ
- 第六章 石見青年の前途
- 第七章 石見青年の大責任
- 第八章 石見青年處生の方針

第九章 立身の要訣を説きて石見青年に望む

第十章 結論

終章 石見青年の前途

石見青年の前途

第一章

第二章 石見青年の現状

第三章

第四章 石見青年の理想

第五章 石見青年の行動

第六章 石見青年の教育

石見青年論目次

# 石見青年論

大谷暉男著

## 第七章 緒論

禽鳥の尙ほ巢中にありて。親鳥の哺育を受くる間は。羽毛猶ほ全たからず。翅も亦舒ひず。己れか巢を以て天地と心得。未だ氣海の波濤を知らず。雖親鳥の保育宜しきを得て。羽翼已に具備し。漸く巢を脱するに至れば。初めて天の高きを知り。地の廣きを覺り。最早己れか小天地に離脱するに能はず。其意に任じ。飛ひては天に戻り。俯しては地に啄む。是に於てか。始めて自主獨行し。禽鳥の仲間に入るなり。翻て思ふに。吾人亦之れに似たるあり。一旦時期の至るに及び。黃口を脱して。始めて特立獨行の人となり。以て震天驚地の事業。電光石火の活劇をも且つ爲し且つ演

するなり。然ら而して。人の此時期に萎れるものを青年といふ。夫れ巍然として聳む。進々として走るものは。山嶽にあらずや。滔々として流れ。洑々として迷くものは。水流にあらずや。石は以て築くへきも。以て陶すへからず。土は以て陶すへきも。以て築くへからず。鳥々たる楊柳は。常に風に折れざるも。亭々たる松柏。時に摧けて薪となる。是れ皆。其の特性のよりて然らしむる所にして。之れを如何ともすへからざるなり。豈唯山川草木の屬のみならんや。人には人の特性あり。鳥には鳥の特性存ず。青年亦青年の特性なくんはあらず。何をか青年の特性といふ。皓潔なること雪の如く。艶麗なること花の如く。劍の如く凜烈に。風の如く浙瀝なる。是れ青年の特性なり。

壽永の昔。一の谷落城の際。心靜に。青葉の笛を吹きすさひし青年の心事を看よ。陽春露を含める海棠に對するか如きにあらずや。落花紛々。雪紛

やたる。櫻田の門外。岩かねも貫らさらめやと。大聲に呼はりて。白晝大老を斃せし壯士の心事を看よ。嚴冬白刃を執りて。叱咤一番するの想あるにあらずや。又看よ。村田清風を。釋迦や孔子も斯くやと。歌ひし吉田松陰の先導者たる村田清風を。

パトリックヘンリー曾て曰へるあり。我に自由を與へよ。然らすんは死を與へよと。夫れ。百難屈せず。萬苦撓まず。一搏して天下に雄飛し。苟も素志を達するにあらずんは。寧ろ斃れて而して曰ひの大精神は。之れを進歩的。献身的の青年を措きて。將た誰に向て求めん。嗚呼青年の本領も亦偉なる哉。

青年已に此本領あり。此特性あり。熱血濺く處。忠となり。孝となり。熱涙滴る所。信となり。悌となり。以て社會をして。血あり。肉あり。旺然として活動せしむ。嗚呼。青年壯士は社會の生命なり。天下の動機なり。青年なくんは

(四)

社會は死すべし。壯士なくんは國家の元氣は消ゆべし。又看よ。新日本の歴史は青年の歴史なり。新日本は青年によりて建設せられしにあらすや。尾崎學堂曰く。新日本の社會は。新日本の青年にあらざれば。之れを幹旋經理すること能はず。舊日本の老人をして。新日本の事に當らしむるは。猶ほ獵夫を驅て。舟を行らしむるか如しと。夫れ然り。吾人の責も亦大なりといふべし。若し夫れ。世間幾多の叩頭俛首して。其身を售る。軟骨青年は。社會の蠱のみ。死せる青年のみ。

石見青年諸子よ。銳眼を開きて。石見社會の狀態を見よ。吾人は果して現時の石見社會に満足すへきか。現時の石見國は。舊日本の石見國にあらず。新日本の石見國なり。縱令六十の青年を見るも。紅顔妙齡の老人を容るゝの地なし。有爲多望の石見青年諸子よ。暫く吾人が陳述する所を聞け。

論年青見石

## 第二章 石見青年と石見

夫れ吾人の郷國なる石見の盛衰興亡は一に石見青年の舉止進退の如何に伴ふものなり。石見青年なる哉。石見青年なる哉。石見青年なくんは石見の社會は倏ちにして荒廢疲弊すべし。石見青年なくんは石見の社會は忽ちにして紊亂破壊すへきなり。然り天下第一日も石見青年なくんは石見の社會は決して一日の命運をも保つと能はざるなり。是れ他なし。石見青年は石見の生命たればなり。動機たればなり。嗚呼石見青年の石見に於ける實に唇齒も齒ならずといふべし。然らば即ち現時石見の地位或は社會の狀態に就て諸子と共に一考するも亦甚た必要あらん。人はいふ石見は日本の僻陬にあり。土地の秀るなく。物産の勝るなく。久しく北海に閉鎖せられ。文化も亦後る石見人たるもの何ぞ夫れ不幸な

論年青見石

(五)

るやと。或れ石見人を振起せしめんとして却て極端に陥ひしものにあらずんば即ち痴人夢を説くの類のみ。石見の風土は如何。石見の地は事業の起すべきものなきか。石見の海も亦言ふに足らざるか。石見は果して日本國中の最貧弱國なるか。最下等の社會を組織せるか。嗚呼。妄も亦甚しからずや。石見の國たる中國の極西に位置すと雖。地域廣茫にして山秀て、水清く風土宜しきを。得寒暖中和し河に郷川高津川の便あり。北は一帶海波濺々として遙かに露西亞朝鮮に對し無盡の寶庫は戸を開きて石國人を待てり。濱田港を以て朝鮮貿易輸出港となさんとの請願國會に上る豈偶然ならんや。此土地以て農業を興すべし。此山以て礦業を開くべし。此水以て航海業を行ふべし。水産業を勉むべし。諸子尙ほ疑ふあらは乞ふ左の表を見よ。事實は諸子をして諾せしむるに足らん。

石見産物統計表

第一 農産物

	逕摩	安濃	邑智	那賀	美濃	鹿足	計
米	二八、一七五石	三二、〇二四	五三、六六七	七〇、七五八	五七、五〇五	二八、七一一	二二六、七九〇
麥	一六、八三三	一〇、七五四	一七、五四一	四二、九一一	七六、一〇九	六三、八一一	一、〇〇、〇〇〇
大豆	一、三〇六	一、一三六	一、五三二	三、四〇九	一、九三五	九〇六	一、一、二三四
粟	一、四四三	六、八一	一、六〇三	三、九三三	一、三三三	五、三三三	一、三三、三三三
稗	一、四	一、	一、	八、八一	六、五五	四、五	一、三三、三三三
黍	一、八一	一、	一、	三、六〇	三、三三	一、八一	一、九〇、一一一
蜀黍	三、三三三	一、三三三	一、六六六	一、七九九	一、八二二	一、三三三	一、三、三三三
蕎麥	四、二八	四、二二	六、五九	二、七九九	一、七九九	七、〇〇〇	六、六六六





(一) 石見青年會

品名	逕摩	安濃	邑智	那賀	美濃	鹿足	計
鱈	三三三一	八八	—	二五九九	二二〇〇	—	二、九二八
鰯	三、八八七	三三三	—	三、〇四九	九一〇〇〇	—	一七、一六九
鮭	三三六	四三三	—	一、〇七二	—	—	一、八三三
河豚	二五〇	八、一三六	—	三、〇六五	六三〇	—	二、九〇二
鱒	二六、三〇〇	五七、九九八	—	三、六八六	—	—	八、九七四
鱈	一六、一〇〇	一六〇	—	四、九六六	六、一四〇	—	六、五二四
鮭	三三、九五〇	二八、〇六〇	—	一、六七九	五九、八〇〇	—	二二七、六二九
鱈	—	—	—	—	—	—	—
鮭	一五九、〇八九	三四、七五〇	—	一、一〇二	六三、七九〇	—	二〇五、八七五
計							

第四水産物〔甲海水〕 千貫以下のものを除く

石見青年會 (二)

第二畜産物

品名	逕摩	安濃	邑智	那賀	美濃	鹿足	計
屠殺牛	—	二九	三、二九九	二一九	—	二二	六、五八
牛	—	三、〇〇〇	一、三九〇	七、三三四	一六、五八〇	二、一、九五四	三〇、三三八
馬	—	—	—	—	—	—	—
牛	三、二八六	三、九〇六	七、〇〇五	六、〇五八	四、九八二	三、三八四	二八、五九一
計							

品名	逕摩	安濃	邑智	那賀	美濃	鹿足	計
生糸	—	—	—	—	—	—	—
麥稗紐	三、七五二	—	—	—	—	—	三、七五二
陶器	六、七八九	—	—	—	—	—	六、七八九
紙	—	—	—	—	—	—	—
呉坐	—	—	—	—	—	—	—
計							

産地	鮎	鮑	海苔	石花菜	裙帶菜	黒菜	海藻	海産	海産
逕摩	111	111	2180	471	7380	5800	4000	8151	4000
安濃	350	350	250	250	250	3360	100	100	100
邑智	760	760	100	100	100	100	100	100	100
那賀	630	630	100	100	8350	100	810	250	810
美濃	707	707	420	127	1860	100	100	100	100
鹿足	111	111	100	100	100	100	100	100	100
計	2570	2570	970	1120	3520	3840	4200	11151	4200

第五水産物 〔乙淡水〕 百貫以下のものを除く

産地	飯	烏賊	鱒	鰻	黒鯛	方頭魚	黄貂魚	イカケ	雑魚	蛤
逕摩	100	3300	6300	1100	2200	2200	1500	1800	100	100
安濃	100	3300	6300	1100	2200	2200	1500	1800	100	100
邑智	100	3300	6300	1100	2200	2200	1500	1800	100	100
那賀	700	6000	1200	1200	1200	1200	1200	1200	100	100
美濃	500	1200	1200	1200	1200	1200	1200	1200	100	100
鹿足	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
計	2500	15000	25000	5000	10000	10000	7000	8000	500	500

石見青年論 (四一)

鯉	鮒	鰻	鱈	鱒	鮭	鱈	鮭	鮭	鱈	鮭	鮭	鱈	鮭	鮭	鱈	鮭	鱈	鮭	鱈
10	5	100	100	500	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

石見青年論 (五一)

備考 本表は明治廿七年五月出版の島根縣農商統計表に由り  
 は産額一般に於て増加せしに相違なかるへし  
 表中△印を置くものは本縣下に於て産額の首位を占む  
 るものなり

我が石見は此の如き天賦の良土たり石見瀾は無盡の寶庫なり嗚呼石  
 見青年生を此の良土に享く何の榮か之れに如かん宜しく奮發して天  
 の我に賦與する本職を盡し以て國家の富強文明を計るべきなり然る  
 に怪むべきは現時の青年なり現時の石見青年は毫も意を此に注かす  
 悠々閑々として徒らに泰平の夢に厭き緩慢平氣恬として預みざる到  
 る處殆ど然らざるはなし石見青年何ぞ夫れ無精神なる思ふて此に至  
 れば吾人實に未だ曾て嘆息せずんばあらず石見の動機たり生命たる

青年諸子よ、須らく清眼を開きて我が石見今日の光景を看よ。吾人が満足の意を表し得べきもの夫れ幾何をや。中等教育の振起、養蠶製絲の業と土木の奨励、水産の業或は勸農或は鑛道、敷設の計畫等、壯は即ち壯なりと雖、要するに表面上の形式のみ事漸く緒に着くのみ。未だ顯著なる功績を見されは決して之れを以て他に誇るに足らざるなり。嗚呼、此良土をして殆ど瓦礫と一般たらしむるものは、抑も誰の罪をや。試に見よ、有爲の青年事を興し業を成すもの幾人がある。吾人は石見青年の無氣力無精神なる萬事を擧げて之れを老成者流に一任し一向顧慮する所なきに由るといはざるを得ず。苟も此の如くして放棄せば、社會は愈疲弊し荒廢して已まんぬ。女當強文明豈夫れ期すべけんや。加之昨今水災相續き之れか爲めに幾多の生命を傷ひ、夥多の土地財寶を烏有に歸せしめたり。是れか爲めに農民の疲弊は一層を重ねた。諸子もし一たび知

事の報告に接せは果して如何の感がある。吾人今にして之れを思ふに猶ほ慄然として身に粟を生ずるを覺ゆ。石見青年諸子よ、卿等は此の不幸を黙視するか。卿等は此慘劇に對して對岸の火とも思はざるか。果して然らば吾人は諸子の眼中石見あるやを疑はざるを得ざるなり。翻て遠く笈を都府に負ふ石見青年は如何。吾人は幾多の有爲なる青年か志を立て、郷國を立つる年々歳々なるを知る。然れども學若し成らずんば死すとも還らざる青年學成り業遂げ錦衣を故郷に飾る青年に至りては微々として曉晨に星を望むよりも稀なるを知る。彼等は概ね都會にありて業務の執るべきを求め郷里に在りて事業の成すべきを知らざるなり。故に彼等は成業の後と雖各職を官衙に求むるにあらすんば耻ぢ身を社會商館に投じ其希ふ所に若譽利達に存するなり。甚だむきに至りては螢雪の苦學、否開遊放逸

の爲めに僅かに贏を得て違ふものは生意氣にあらずんば則ち粹人の名のみ。石見青年現時の狀態斯の如し。石見青年の無氣力無精神何より一に此に至れるや。之を青年の上に見るに已に斯の如し。況んや其他をや。社會の凋弊墮落何ぞ怪むに足らん。現時の社會が日々吾人が已に述べる如き狀態に陥いる所以のものは施政宜しきを得ざるによるか。國民の政治思想微弱にして自治の精神に乏しきによるか。夫れ或は然らん。然れども之れ抑々未なり源に溯て之れを尋ぬれば石見に人物なきは此の一大原因ならんか。何をか人物といふ。力山を抜き氣世を蓋ふといふ項羽其の人の如きをいふか。戦へば必ず勝ち攻めれば必ず取る拿破崙其人の如きをいふか。否否吾人の所謂人物則ち揚山蓋世の英雄はあらず。必取必勝の豪傑にもあらず。なほ吾人の所謂人物とは他なし。人生天賦の特性を發揮し固有の本領を

守り至誠至剛毅然として奮ふべからず。以て日本國民たるの品性を失はざるものといふなり。東湖曰く。徵古稽今發明真正之大道。右文尙武。鼓舞天地之氣。是れ眞に人物養成の極意なり。吾人常に石見に人物なきを怪むや久し。二たは東湖の言に接して釋然として之れを解せり。請ふ天下の人士吾人をして妄論者視する勿れ。吾人は斷していふ。石見に人物なきは眞正の大道を發明し天地の氣を鼓舞せざるにあり。實に石見人士が精神的教育を度外視するにありと。精神的教育の必用は吾人の嗽々を俟たず。大方の識者の己に業に唱道する所なり。其必用なる殊に家庭教育に於て然とす。看よ時の古今を問はず。洋の東西を撰はず。身を立て道を行ひ天下に名あるの士は家庭教育の力最も與て力あるにあらずや。家庭に於ける嚴父よりも寧ろ慈母の力與て大なるにあらずや。我が國維新以前學制未だ完備せず。學校の

設未だ山村僻邑に及はざるに當りては世人夫に家庭の教育に注意し武家は武士を養成し町人は町人を養成し農家は農夫を養成し賢母多く人物輩出せり。然るに王政復古貴賤混合し社會は一大變遷を來たし學校は到る處に設けられ學制屢々改正せらるゝ今日士民悉く士女を通學せしむるの自由を得しより自ら家庭教育を放棄するに至れるは是れ社會の一大變遷に遭遇せしに由ると雖學校と家庭との連絡なく學校を以て子女の教育は一切教師先生の責なりと心得たる父母の膠見に職由せずんはあらず。然れども之れ已に過去の歴史なり。現時の家庭は果して如何。現時の子女に果して慈母を有するか。如何なる家庭教育を受くるや。

曾に家庭のみならず學校に於ける精神的教育とは如何なるものぞ。吾人曾て一小學校を訪ふて修身科の授業を參觀す。教師先生頗りに忠を

説き孝を説く一に修身書に是れ依る。生徒果して忠を解し孝を解し得たり。否言語に於て之れを解し得たり。修身書を讀むと一に小學讀本を讀むか如く之を暗誦して能事終れりとなす。修身の口授終るや教師先生は任果たりとなし生徒も亦事休せりとなす。生徒他日人に語りて曰く我君に忠を盡さんとす君の馬前に討死すると能はざるを如何せん我父母に孝を行はんとす父母未だ老す未だ曾て病蓐に在まざるを奈何せん。嗚呼石見數千の兒童子女を養成し新石見を繼續せしむべき教師先生夫れ幾何の赤誠あるか幾何の愛國心あるか。吾人は世の父母教師先生に向て一大注意を叫はざるへからず。尙ほ石見の教育に關しては吾人筆を換へて之れを論すへきも石見に人物なき所以は諸子曰に之れを解せしならん。

夫れ愛郷心は愛國心の字なり別名なり。愛郷心なくして愛國心を望む

を得入附んや。吾人の郷國は之れを次にしては日本なり之れを小にしては若見國なり。石見國に於て吾人の郷國を求めは郡なり町村なり。諸子郷を愛するの心あり國を愛するの心あるも腕を扼して立つの慷慨なく此腐敗し了らんとする社會に夢を食らんとするや。抑も又一片の愛郷心存せざるや。

第三章 石見教育不振の原因を論じて石見青年

年の覺悟を促かす(上)

大凡教育は人間感化の主動力にして國家獨立の基礎因て以て立る所以なり。乃ち之れを天にしては一國の興廢存亡より之れを小にしては一人の榮枯盛衰に至る迄其發し來る所悉く教育てふ一源泉に在らざるなきを著れば教育は決して等閑に附すべからざるは蓋し何人も確

信して疑はざる事なるを嗚呼教育者の責任亦大なる哉。されはにや萬事に無頓着なる石見人士に於ても教育の一事に至りては流石に見る所あるか如く常に其普及を圖るに汲々たるを以て現に初等教育に至りては國內到る處其緒に就けり。而るに彼等有志者の慧敏なる夙に中等教育の目下欠くべからざるの必要あるを看破し忽ちにして中學校設立の企圖を起し資を投し財を給し東奔西走粉身盡力の結果遂に過る明治廿四年を以て石見學校を濱田に設立するに至れり。然るに尙ほ足れかとせず勳勉至らざる處なく同廿六年を以て該校を縣立第二尋常中學校となし其基礎を牢固にしたり。而して尙ほ進んで廣く之れが基本金を募集して以て永遠の獨立を保持せんとす。其趣旨善なるものを見るに如く

凡ソ國民ノ東野實業ノ一トシテ教育ヲ擴張消長ニ因テ其力ハ莫シ

故ニ屬雲間濶々南洋ニオリテ優勝劣敗ノ世界ニ落キ我帝國ヲシテ萬國無比ノ國躰ヲ保護シ其獨立ヲ維持スルノミナラス進ンテ列國ヲ凌駕シ世界ニ雄視セシメシト欲セハ國民ノ元氣ヲ奮起シ忠愛ノ精神ヲ振作シ同心協力四千萬人維レ一心ナラサルヘカラス抑モ之ヲ爲ス本アリ原アリ教育ヲ隆盛ニシテ國家ノ富強ヲ謀ルニアリ是レ誠者ハ汲々乎トシテ苦慮盡瘁スル所ナリ

中此時ニ當リテ我石見國ハ如何ソヤ其位置ハ山陰道ノ極西ニアリテ實ニ帝國ノ僻陬ナリト雖モ其國民ノ如何ハ固ヨリ國家ニ大關係ヲ及ホス丁智者ヲ待タスシテ明ナリ且ツ其地勢ハ一葦帶水ヲ以テ滿韓三州ニ對シ異日帝國ノ軍事上及經濟上ニ於テ重要ノ關係ヲ有シ内外人ノ注目スル所トナルヤ必セリ其帝國ニ關係アル斯ノ如シ愛國者ニシテ其措置計畫ヲ講セスシテ可ナランヤ

願キテ石見全州ノ現狀ヲ視ルニ封建制度ノ時ニ當リテ各地ノ治道其趣ヲ異ニシ萬般ノ事均一ヲ欠キ遂ニ今日ニ馴致シテ其餘弊ノ及於所自ヲ團結力ニ乏シク一國ヲ舉リテ遠大ノ事業ヲ企圖スルカ如キ最モ困難ナリ立國ノ基礎タル教育ノ如キ初等教育ハ略ホ其緒ニ就ケルニ雖三十余万ノ人民ニシテ中等以上ノ教育ヲ受ケシモノ寥寥トシテ晨星ニ如ク隨テ殖産事業ハ之ヲ隣國ニ比スルニ數歩ヲ讓ルノミナラス國産日ニ萎靡シテ財源月ニ涸竭セントス之ヲ要スルニ石州ハ百事万物他國ノ後ヘニ逸巡スルハ癡態ナリ志アルモノ誰カ長大息セザランヤ

石州ノ現狀此ノ如クナレバ石見ヲ愛シ國家ヲ思フノ志士ニシテ帝國ヲ爲ル石州ヲ爲ル之ヲ匡濟スルハ策ヲ講シ石州三十余萬ノ人民ニシテ他日騰々嗚呼ノ悔ナカラスシテ可カランヤ其策固ヨリ



一ニシテ足ラズト雖最モ急務トス可キハ中等教育ノ普及完備ヲ圖  
 以テ社會ノ原動力トナリ他日有爲ノ材ヲ養成スルニテ其要ニ那  
 賀郡人民ハ是ニ親ルアリテ石見學校ヲ設立シ中等教育ヲ施セリ今  
 又明年度ヲ期シ縣立第二中學校設置ノ舉アリ帝國ノ爲メ石州ノ爲  
 メ誰レカ之ヲ實セザンヤ然リ雖吾曹ハ猶満足スル能ハサルモ  
 ハアテ大聲疾呼シテ天下ノ志士仁人ニ語テ石州ニ開設スル中學  
 校ハ永久地方稅ヲ以テ之ヲ維持スルハ策ヲ得タルモノニアラス必  
 本ヤ基本資金ヲ積ミテ超然トシテ行政部外ニ獨立スルニアラス  
 ハ決シテ吾曹ノ目的ヲ達スル能ハス請フ之ヲ具陳セン  
 抑モ教育事業ノ効果ハ之ヲ嗜嗟ノ間ニ収メ得可キモノニアラス必  
 其スヤ數年ノ久シキヲ待ツ是ヲ以テ其間若シ事業ノ中止或ハ經濟  
 ノ邊變アリテ其ノ效果ノ完全ナル固ヨリ望ム可カラス學校ヲシテ行

政黨内ニ懸屬セシメ其監督ヲ受ケ其經費ヲ地方經濟ニ仰クハ或ハ  
 縣會ヲ向テ依リ或ハ當路者ノ冷熱ニ隨ヒ或ハ變災ノ爲メ或ハ政  
 黨ノ爲メ其事業經濟ノ消長進退アルハ必ラス免レサル所ナリ此ノ  
 如クシテ完全ノ效果ヲ収メント欲スルモ豈得可ケンヤ故ニ學校ノ  
 獨立ハ教育上主要ノ條件ナリ而シテ之ヲ得ルノ道唯應分ノ基本金  
 ナリ具ナルニアルノミ確乎タル基本金ヲ有センカ縣會ノ向背何カア  
 ラン當路者ノ冷熱何カアアリテ世ノ風潮ニ左右セラレテ事業  
 經濟ニ消長進退ヲ來スノ憂ナク駁ヤトシテ始メテ焉ニ完全ノ効果  
 ナリ取ムルヲ得可シ且夫レ學校ニシテ動モスレハ世波ノ動盪ヲ受ケ  
 テ事業ニ伸縮ヲ來スノ憂ナラシカ教員學生共ニ安ンシテ事ニ從フ  
 コ能ハス焉シテ數年ヲ久シキヲ期シテ效果ヲ取ムルヲ望ム可  
 カンヤ唯夫レ基金確定シ前途憂ル所ナク教員學生共ニ志望始メ

テ堅キ得テ教育製其目的達スルヲ得可也是ト基本金ノ學校ニ  
 二家々可動ヲスルニ教育事業ノ獨立成サレカラサル所以ナリ之  
 ナ實例ニ歐米各國ニ於テ精々多士ヲ輩出セル著名ナ  
 ル學校ハ皆充分ナル基本金ヲ積ミテ獨立シタルモノニアサルナ  
 近來歐邦ノ職者亦學校ヲ獨立セサルヘカヲサレテ唱ヘ基本金ヲ  
 募リ置キテ少津時ニモ基本金ノ學校ニ必要ナル豈敢テ喋々ヲ要  
 セシヤ  
 嗚呼望大石州マシテ新行歩モ他國ニ讓ラス百般ノ事業ヲ執ルニ任  
 ヲル人物ヲ養成シ現今ノ情態ヲ改良進歩セシメテ以テ帝國ニ利セ  
 ンテ欲セバ中央警察ノ中心ニ於テ中學校ヲシテ獨立セシムルヲ要ス  
 總論中學校ハ且地方經濟ニ資ルニ速ニ基本財源ヲ作り行政部外  
 獨立シ萬世不朽ノ學校ヲラシメサルヘカラス此事固ヨリ一大事

業ヲ以テ吾曹ノ微力決シテ之ニ當ルニ足ラスト雖敢テ卒先シテ基本  
 金募集ノヲ道唱シ其發起者ナリテ斡旋ス蓋シ石州ヲ愛シ國家  
 ナ思フノ至情ニ出ツルニモ隱義ニ勇ナル大方ノ諸君吾曹ノ至情ヲ  
 察シ微意ノ存スル所ヲ翼賛シ奮然餘資ヲ投シ此義舉ヲ全フセシメ  
 帝國ニ對シ本國ニ對シ同胞相助ケルノ本分ヲ盡シ永ク石州子弟ヲ  
 シテ諸君ノ博愛ヲ銘肝セシメ石見中學校基本金トシテ應分ノ義捐  
 アラシムルヲ茲ニ寄贈手續ヲ掲ケ以テ天下ノ志士ニ告ク  
 眞に石見人士天晴ノ事業なりといふべし然り吾人は其の熱心を賞賛  
 するものなり然れども斯くの如く熱心なるにも拘はらず司教界の現  
 狀於ては次に此れに反し衰頹不振の甚きか如きは果して何の爲  
 歟か吾人諸君に怪まじはるるなれ請今吾人の信する所を吐  
 露せしむ

思は言ふか如く石見人士は教育に於ては非常の熱心を以て幾多の情  
 實防遏を免かれざるは何人も難決して疑を容れず融認する所なるべ  
 也。故に教育界の現狀に至りては之れを表面上より觀察するときは實  
 に秩序井然たる處一の不足なく萬事完備せるを以て身を教育界に置  
 く之士は皆學生に對する和氣漾々として自由爽快豁如として業務に  
 安する無類の美觀を呈すと雖もたひ翻て内部の觀察を逐くるに至り  
 ては驚愕又驚愕誰か其の表裏顛倒の甚しきを感せざるものあらんや。  
 夫れ教育界の現象を知らんを欲せば先づ學生の風俗品行等に注目す  
 るより真きはなし。

吾人は今日の學生輩が何程揚々自得學識を誇り傍若無人に社會を横  
 行するを雖も内實散等は如何に無氣力無精神なるかを疑はざるへから  
 ず。蓋し何は竟もあれ吾人は今日の學生は腐敗せりと迄に公言せんと欲

するなり。彼等常に學問は威張る爲めになすものなりと信じ知らんと  
 欲するよりは覺えんと欲するに務め席次に關しては寸毫の微をも争  
 ひ品性に關しては一言の之れに及ぶなく天賦の靈性をして毫も自由  
 の發達をなす能はざらしめ高音放語自ら快とし人に輕せられ與まれ  
 厭患せらるゝを以て人に崇はれ敬せらるゝと考へ優柔不斷碌々歳  
 月を過して顧みず或は一方に於ては非常に教師を愚弄し其の缺點を  
 發きて八方之れを罵詈し日も亦た足らざるか如きに拘はらす一方に  
 於ては之れを恐るゝ鬼神の如く一舉一動懼を爲として其の意に逆は  
 さらんことを是れ務め策を廻らして其の歡心を買はんとするもの多  
 く決して公然正を揚げ邪を退け時に師を雖假借することなき眞勇あ  
 るもの誠に塞々たるものは實に天下の爲めに嘆せざるべからず嗚呼  
 何等の醜態ぞ斯くの如くして焉。國家有用の才識を收得すべはんや。

然りと雖も是れ専ら學生の罪と責へざるに於ては、其の責任を重なるの精神を有する以上は、如何に學生の無氣力無精神なるにせよ、決して以上の如き果敢なき有様には至らざるべし。論じて是に至れば吾人實に石見人士か斯く教育に熱心なるに引換へて教育者其の人の甚だ冷淡なるを責めざるべからず。然り今日石見の教育者は二三を除くの外、甚だ不熱心なり。否殆ど其の責任を知らざるものといふて可なり。而して吾人は他縣人に於て特に其の甚しきを見る。嗚呼石見の教育者上卿等は斯くの如く不熱心にして一向顧慮せざるは何故をや。果して何の面目ありてかくも教育に熱心なる石見人士に見えんとするか。教育者たるもの何ぞ猛省する所なくして可ならんや。吾人熟今日の教育界の現状を觀察し諸事悉く衰頹不振の甚しきに驚き進みて其の如何なる事情に基因せるやと

究めんと欲し教育者其の人の舉動に注目するに當り始めて釋然として其の衰頹の偶然ならざるを悟り轉た悲憤に堪えず暗涙袖を濕ほすを覺るざるなり。石見の教育者よ知るや否や良藥口に苦きを。吾人は決して卿等を罵るものにあらず。石見の爲め國家の爲め眞に己を得ず平日の素懷を述べんとするに外ならざるなり。乞ふ吾人をして其の言はんとする處を終らしめよ。

石見の中樞に位し未來の石見中學校なる島根縣第二尋常中學校は明かに石見全体の教育界の現象を見るを得べき反射鏡なり。年々歳々入り来る數十百の學生の學力品性は歴然として各地方小學の教育者の伎倆を表章して余りあるなり。彼等教育者か如何に熱心に其の任務を盡せるか如何に不熱心にその保姆たる職を怠るか之れに照し之れに徹し瞭々として火を見るよりも明かなり。問ふ勿れ島根縣第二尋常中

學校の新學生か薄志弱行進も活學をするの零を知らざるを。之れ決して彼等の罪にあらざるなり。抑、今日の教育者の状態は如何にといふに吾人を以て之れを見れば彼等は決して教育の必要を知らざるものにあらず自己の責任の重大なるを知らざるものにあらず。然りながら其の必要にして又自己の責任の重大なるをも熟知しなから平然として知らざるものゝ如く朝に淳々聖勅を高唱して生徒を教へ夕に花柳に痛飲し寧ろ輕羅となりて細腰に着かんとを希ふもの眞に稀に見る所にあらず。よし斯く迄てに至らざるも學生を教導するものなるに却て學生の爲めに其の學識を輕重せられ其の品性を上下せらるゝもの多きは決して疑ふべからざる事實なりとす。夫れ教師及學生間に於て目今通弊とするところは一ならず。雖兩者至誠の二字を躰せざると以て甚しとす。教師は冷笑して生徒に對し生徒は恐怖して

教師に對す。教師は學生の教ふべきを知て愛すべきを知らず。學生は教師の敬すべきを知らずして唯た恐るべきを知るのみ。是故に兩者の間親情疎く遂に非常の隔絶の有様を見るに至る。近時諸學校に於て師弟間に劇烈なる軋轢を生し種々の紛紜を耳にするに頻々なるは諸子の親しく見聞する所なり。然れども新紙に傳ふ所は十か一のみ。石國に於て豈此現象を見ざるとせんや。是れ果して誰の罪か。是れ果して兩者何れの内に存するか。世の教育者として自任するもの深く思ふ所なくして可ならんや。吾人は今日の教育者を目して強て眠れるものとなさず。然れども其の職務に不熱心なること此の如く其の萬事に冷淡なること斯の如く而して其の責任を輕んずる此の如き者に至りては吾人竊かに「學生第二の石見國民なる」の薰陶を屬すべきを危むなり。學生の無氣力無精神なる何そ必しも怪むに足らんや。吾人は普通教育の最も國

民に必要なを知るを同時に我石見人に於て最も廣く必要なるを知る。故に専ら其の任に當るの諸君に向ひ教育界目今の状態につきるの弊害の存する所を究め至誠至實宜しく負擔する所の任務を盡し以て國家に對する責任を遂くるとを切望して已まざるなり

吾人一步を進めて聊か中等教育の現状を説かん。抑中等教育は其の我石見に布かれてなり且尙ほ淺きを以て未だ事々しく論すへきにあらず。今其の現状につきて種々之れを論ずるは勢當らざるに似たれども退て考ふれば大に然らざる所以を知るへきなり。何となれば弊害の存する所は其の初めに於ては境域自ら狭小なるにより矯むるに容易なりと雖放棄して顧みざる時は忽然として蔓延し遂に如何ともする能はざるに至ればなり。況んや中等教育は將來社會に立ちて我石見を經理し其の進歩を計りて國家の富強文明を致すへき肝要の資財を養成

する基礎の高點たるに於てをや。蓋し中等教育の状態は亦初等教育と同しく實に表裏顛倒の甚たしきものたり。否之れよりも一層不振なりと言はざるへからず。請ふ看よ中等教育は初等教育と異なり石見の全力を擧げて之れに注ぐものなれば萬事大に之れに比して完備に近く勢倍層の壯觀を呈せざるへからるにも拘はらず内實全く相違し殆と言ふに堪ざるの有様たり。現に夫の中學生といへば自然に學生の王と石見社會に特許せられ其の意容堂々として社會を横行するに當てや人々之れを目して石見學生の代表者たりとし書生とは彼等をいふものなりと識認するに至る而して其の實之れを經蔑するなり。嗚呼將來社會の繼續者として望みあるの士其社會に目せらるゝの淺間しきと此の如し。誰か石見の爲め國家の爲め之れを慨せざるものあらんや。

第四章 石見教育不振の原因を論じて石見青

年の覺悟を促かす(下)

吾人は茲に繰り返して言はん是れ果して誰の罪か意ふに必ず因る所  
 なかるべからず。夫れ石見人士の一般に教育に熱心なることは既に公  
 衆の承認するところなり。故に誰かその中等教育に熱心なるを承認せ  
 ざらんや。然れども其の任に當るものは果して能く其任を盡すか否か  
 に至りては公衆未だ必しも之を認めたりと謂ふべからず。然り中等教  
 育の當任者は或は不熱心なりと見ゆとは吾人は決して躊躇せず之を  
 斷言して憚らざるなり。只何程不熱心に見ゆるかに至りては少しく  
 憚る所あれば言はず。されど何人と雖一目せば容易に知り得べきこと  
 なれば又深く論するの要なし。教育界の現状實に不振衰頹の甚しきを

致すもの豈偶然ならんや

然り而して斯く中等教育の振はざる其原因たる處實に石州唯一の中  
 學校設立以來其教職たるもの責任に歸せざるを得ず。元の石見學校  
 長岩波靜彌氏の如きは教育に就きて稍會得せる所ありしか如く生徒  
 も亦心服するあるか如し。故に將來大に望ありしも奈何せん教育家た  
 るの品性に十分ならざるありて社會の制裁は遂に彼をして已むなく  
 其職を去らざるべからざるに至らしめたり。而して彼に繼きたりし田  
 中清之助氏は暫く措き第二尋常中學校長として任命せられたる石田  
 氏幹氏は如何。赴任の前は某裁判所の司法官試補たりし履歴と法學士  
 てお肩書とは其教育者としての資格と其技倆の一斑とを推知するに  
 足るべし。吾人固より人物を解剖し批評するの眼光なしと雖氏に對し  
 ては一面職にあらず請ふ少も其職ある所あり

石田氏が教育者としての價値如何。吾人は教育者としては石見の教育者としては否や苟も法律學者を養成する所にあらざる未來の石見中學校なる第三等常中學校長としては氏に憚然たる能はず。氏の技倆を揮ふは寧ろ他の方面にあらん氏の得意は蓋し教育にあらざるへし。氏か學生に對する行爲は氏の一面を寫影する鏡なり。氏は果斷勇決の人にあらずして一種の神經者に近し或は事を企て、難苦に逢へば成果の如何を問はず中途にして廢止し或は法則を以て學生を束縛せんとし又はせざらんとするか如き一々枚擧する遑あらず。加之氏は快辨の人にあらす學生の爲めに訓戒諭示するも其意を盡し難くして重きを學生に取るに十分ならず。一言以て氏を評せば氏の腦は教育家としては造られずと信す。余は曾て中學生として罪罰を一身に負ひて石見國の爲めに學校の爲めに同窓生の爲めに將た石田氏幹氏其人の爲めに

氏の面を犯し忠告せし所以のもの實に此に在り。豈敢て彼を惡まんや。彼を愛すと共に石見中等教育を愛せはなり。

石見教育界の現状たる以上述ぶるか如し。吾人は實に石見の爲め國家の爲め之れを嘆せざるを得ず。望むらくは教育者諸君よ深く猛省する所あれ。一身の行爲は何にても可なり。然れども有爲の少年を害ひ其精神を不具とし石見の繼續者を害ふに至りては其罪決して追ふべからず。吾人は是より教育界の現状斯の如くなるに就き現今石見の生命たり。動機たる石見青年の覺悟を説かん。

意ふに我石見の暗澹たる教育界の現状を一洗し振はざるの衰勢を挽回せんと欲せば。到底彼の因循なる老輩に望むべからず。必ずや石見の活青年に依らざるべからず。然らば則ち石見青年たる者固有の特性固有の本領を發揚し凜乎たる氣力を以て之に向ふの覺悟なからざるべ



からず石見青年諸子よ宜しく此の教育の衰弊を挽回すへき方策とし  
て吾人が語る所を聞け

吾人の以て方策ありとするものは唯一あるのみ。何そや他なし教育の  
職に當るものをして成るべく同郷の人たらしめ始終免かるべからざる  
の責任を保たしむること。是のみ。素より同郷の人なりとて悉く職務  
に忠なるものにあらず。されど他郷の人に比較するに當りては自ら其  
差異の存する所知るべきのみ。何となれば教育は大に國民の風俗習慣  
特性等に關係するのみならず又愛郷心如何にも關するなり。かゝれば  
一般の教師先生は苟も角も校長たる其人は成るべく同郷の人若くは  
同縣の人を以て之れに充つるを要す。石見中學校基本金さへ廣く募集  
せられつゝあるを以て其結局を告ぐる曉には今の第二尋常中學校は  
永遠の獨立を全ふするに至るべければ國民教育を實際に行ひ併せて

私立中學校と成るを以て嚴然たる石見人士養成所なるにより之か管  
理をなして石見教育の大任を一身に負擔する所の其人は親愛なる同  
郷若くは同縣人を措きて之を何處にか求めん

石見青年諸子よ石見教育の現状畧ほ此の如し。何ぞ石國の爲め國家の  
爲め確乎たる覺悟なくして可ならんや。徳富蘇峰嘗て吉田松陰の能く  
教育の目的を知れることを證明して曰く吉田松陰の如きは教育家と  
しては固より變則の教育家たるに相違なし彼れベスタロツチの教育  
論を學びたることなし彼茶溪の上の高等師範學校に於て教員たるの  
免許狀を得たることなしされど彼は能く教育の大目的を知れり曰く  
曾て王陽明の年譜を讀む其門人を啓發するもの多くは山水泉石の間  
に於てす竊かに其理に服す吾陽明にあらざるなり然れども朋友切磋  
亦當に斯の如くなるべしと吾人曾て親しく彼の講義に臨みたる人に

聞く曰く其書を説くや古今に出入し之を實事に照し意氣軒昂聽者皆凜然として激勵奮發せざるなく而して其聲殷々猶耳にありと聞く彼の松下村塾なるものも臺處六疊の小屋に過ぎず而して維新革命の時に際し驚動地の偉勳を奏したるものは實に此裡より胚胎し來れり教習小事にあらず感化大事なりとは是の謂にあらずやと眞に然り眞に然り諸子之を思へ

第五章 石見人の最大弱點を論じて石見青年

に及ぶ

吁吾人之れを口にするさへ甚だ愚ま々しき限りなから黙して己むは吾人の志にあらず否寧ろ吾人は多少の耻辱をも忍びて茲に明言せざるべからず吾人の赤誠は遂に吾人を驅て茲に公言せしむ蓋し其弱

點を論ずるは吾國人の弱點を矯正し併せて其の長所を發揮せんが爲めなり。即ち他國人を凌駕せんか爲なり天下に雄飛せんか爲めなり。抑吾人の郷國なる石見か百事沈滯萬物萎靡し建國三千年來邈焉として日本の歴史に著しき印象を止むるとなきのみならず徒らに他國の後に瞠若たらざるべからざるものは何ぞや吾人は已に述ふるか如き天賦の良土に生を享く吾人怨を昊天に訴ふるべからざるなり。然らば即ち何故そや吾人は石見人の著しき弱點を有するに基因するとを斷言するに躊躇せざるなり。蓋し石見人の弱點たる一にして足らず。沈思靜想能く石見人が日常の行跡に就き細微精密なる觀察を遂ぐるに當りては何人と雖歴々として其の弱點を存する所を識認すべきなり。夫の幾多石見人士が粉身盡力以て企圖計畫し來れる百般の事業が殆ど其成功を見ざる所以のものは曠世に於て此の點に由るべしはあらず

之を看まれば石見國管轄線鐵道の如き栃本縣人放逐計畫の如き近くは夫の朝鮮貿易開港企圖の如き或は藤石鐵道敷設の如き概ね人目を引く如き事業にして成功の果を收めたるもの夫れ幾何かある石見人の失敗豈に茲に止まらんや。石見人の結社に於ける失敗亦大なる小となく大となく一々之れを數えれば目も亦た足らざるへし吾人亦重なるもの二三を擧ぐれば協同會社、金融會社以上、野上、教育會社三、養蠶會、石見生糸會社以上、大森の合瓶軒若しくは遂に會社を整理し事務を扱ふものなく、釐傾き草茂り、卓下に狗伏するに至れる江津の擴産社等皆失敗に終らざるなし。

嗟乎吾人は一日も早く吾人石見人の弱點を矯正し斯かる失敗に終らざることを務めざるべからず。

今石見人の弱點中最も顯然たるものを擧ぐれば實に左の如し。

第一石見人は自主獨立の精神に乏し

第二石見人は思考觀察の念慮に乏し

第三石見人は一致團結の力に乏し

第四石見人は堅忍不拔の氣力に乏し

以上の如きは其の概略に過ぎすと雖亦以て石見人の弱點か那邊に存するかを知るに足るべし吾人由は二三の實例を擧げたれば諸子前後を比較參考すれば思ひ半は過ぐるものあらん。之れを要するに石見人が政治上に於ては常に他國の後尾に他國人士の鼻息を窺ひ一喜一憂するか如き或は石見人が社會の狀態に頓着せず經濟界の變動をも注目せず唯自己の囊底目に重きを是れ喜みか如き夙に有志の憂ふるところなり吾人何ぞ今にして始めて存見半紙の聲價墜落せるを嘆まらん。且利を他國人士に占められ權益を近隣に奪はれ憂鬱せられを知る

其自己の囊中の糧好らざるは、其の弱點を以て吾人の通弊を以て吾人の  
 れを商海にのみ購ひると言はんや。工業に於ても然り、農業に於ても然  
 り、漁業に於ても亦然り、萬事皆然り、嗚呼是れ石見人士の弱點に基因せ  
 ざるもせんや。かるか故に吾人は石見に於て商海の牛耳を執る大商業  
 家を求むべからず、大工業家を望むべからず、大漁業家を望むべからず。  
 唯商業家としては豪商大賈に翻弄せらるゝ小商人漁業家としては扁  
 舟の漁夫を見るのみ、石州の衰頹荒廢に陥らんとする豈怪むに足らん  
 や。  
 聞く石見社會の中等以上の人士にして石見義友會を組織し廣く軍夫  
 を募り巨利を占めんと圖るものありと、吾人は汗顔の外なきなり。此れ  
 豈に歴々たる紳士縉商の事業ならんや。彼等もし眞に愛國の念あらば  
 多少自己の囊底を傾きて以て事に當るべきなり。紳士縉商此の時に盡

さすして何れの時を以待たん。然れども其の巨利を占むるを圖るは  
 は蓋し虚評ならん其の虚評なるを望む。又或は石見人士の奔走中等教  
 育に於て務めたりと雖教育者其の人を得ず殆ど其の功を没せんとす。  
 噫吾人論し來れば益々諸子と共に石見人の弱點を矯正し併せて長所を  
 發揮することを務めざるべからざるを感するなり。  
 夫れ石見人か以上の如き大弱點を供る不幸の原因たる固より一様の  
 事情に由るものにあらず。へしと雖専ら地勢上の影況よりして獨り  
 東漸の開化に殘され國人自ら眼界の狭小なるを覺らすして區々たる  
 小天地に安せしか故に相違なきなり。遠き古昔のとは暫く措きて論せ  
 ず。近き封建時代に就きて之れを按ずるに石見の地たる實に大牙の分  
 割制を受けて恰も夫の大貌利顔國か英蘭蘇格蘭及威士の諸部に分た  
 れ各自其の風俗習慣を異にし氣質に相違あるか如く領主の異なるに

於て百事萬端其の趣を異にし決して統合の治に浴せず專制抑壓の下  
 毫も相互の氣脈を通ずること能はず小天地に齟齬として自ら甘し積  
 弊の久しき遂に人生天賦の靈性を消滅し以上の弱點に投せしものに  
 外ならざるなり。然らば石見人士今日の耻辱は全く封建制の賜なりと  
 言はざるべからず。而るに夫の老成者流其身未だ封建の餘臭を脱せず  
 して此新社會に處せんとす嗚呼難ひ哉。我石見の萎靡沈滯豈偶然なら  
 んや。而して現今石見の生命たり動機たる青年に至りては則ち如何能  
 くも其の弱點に於て似たる哉。生來傳承せる積弊は實に壯大なる威力  
 を以て彼等の身中に蟠居し其の威力の及ぶ所彼等をして全く石見な  
 る觀念を去らしめ將に社會を殺して而して國家の元氣を消滅せしめ  
 んとす亦危からずや。故に吾人の反覆論じ來れるか如く我石見をして  
 全く前來の光景を一變し暗澹たる社會の妖氣を排除し赫々たる光輝

を注ぎ社會をして活動せしめ清爽明媚燦然たる壯觀を呈せしめんと  
 欲せば先づ須く以上列擧せる弱點の存する根源を探究し我々汲々之  
 れを救治の策を講せざるべからず。而して今奮然立て之れに當るべき  
 ものは誰ぞや。意ふに夫の封建時代の遺物たる老成者流は其病已に膏  
 盲に入れり今にして之れを療治せんと欲せば非常の勇力なくんばあ  
 るべからざるを以て容易に望むべきにあらずと雖紅顏妙齡なる石見  
 青年に至ては英氣勃々方に用ふべし。凡る禍害は嫩にして刈らざれば  
 斧を用ふるの憂あり。現時の石見青年未だ此の弱點に浸潤せず英氣亦  
 盛なり。嗚呼努めよや多望なる好青年

## 第六章 石見青年の前途

皚々たり高角山上の雪皎々たり蟠龍湖畔の月郁々たり斷魚溪涯の花

眞美極麗千秋の粹を表し巍峨として萬峰の上に秀つる三瓶の岳滔々として萬里の蒼波に注ぐ郷川の水到る處佳絶の風景は是れ石見人に於ける偉大なる自然の感化力なり。而して此の感化力は實に石見人をして其の本然の美質を備へしむ

人は物に對すること各其の感覺を異にするものなり。即ち曉々たる笛聲に對しては愉快なる感を興し爆然たる砲聲に對しては恐怖の感を興し窈窕たる佳人に對しては愛慕の感を興し猙獰なる醜漢に對しては厭忌の感を興すは固より資性の然らしむる所なりとす。斷崖絶壁に對する時美花麗草に對する時昂濤激波に對する時に於ける各異様の感なくんはあらず。造次の間顛沛の頃に在りてすら尙ほ且つ然り。況んや常に天然の佳景に接するや。豈全然同化せらるゝことなきを得んや。知るへし茫々たる沙漠の地に住する亞刺比亞人の如きは氣質

自ら迂濶怠慢に天地正大の氣粹然として鍾まれる處に住する日本人の如きは氣質自ら温厚に篤實に英邁に剛毅にあることを。我石見人にして何ぞ獨り此の天則に違へるの理あらんや。是れ實に石見人が本然の美質を備ふる所以なり。吾人は前章に於て略ぼ石見人の弱點に就きて論述して以て石見青年諸子に向ひ其の矯正を促したれば此に又本然の美質を説出し以て其の涵養を冀はさるへからず。蓋し是れ諸子の前途を論ずる正當の順序たるなり

夫れ石見人は至誠剛直なり。清廉潔白なり。質素恭儉なり。稟性麗はしきこと恰も高角の雪の如く蟠龍湖の月の如く斷魚溪の花の如し。至誠剛直なる故に自他を欺くことなし。清廉潔白なるか故に無邪氣なり。質素恭儉なるか故に驕傲放恣ならず。而して忠君愛國の節義心に至ては實に三瓶岳よりも高く石見瀨よりも深し。要するに石見人は天眞爛熳の

君子にして之れを正言せば醇乎たる田舎漢なりといふも決して不可なかるべし是れ此を本然の美質といはずして何うや若し夫れ世間吾人の言を疑ふものあらば請ふ之れを石見人の一舉一動に於ける實跡に徴せよ。故に吾人の精神たる徹頭徹尾其の耻つべき所の弱點を矯正し誇るべき所の美質を涵養せんとするに在るなり。石見人既に此の美質を有す焉を天下に雄視すること能はずといはんや。蓋し前章にも言へる如く數多の大弱點は皆是れ封建時代の痼疾にして決して自然に感化せられたる所の眞性にあらざれば其の矯正の路あるや必せり。尙ほ其の方策に至ては之れを後章に述ぶべし。

然り而して親愛なる石見青年諸子は實に此の美德を繼承し來れる者なり嗚呼多福なる哉多幸なる哉。此の美質を備へ此其土に生活する者皇天上帝豈偶然に之れを賦與せんや。憶ふに我石見か爾來久しく百事

沈滞して徒らに他國の後尾に瞻若たらざるべからざりしものは未だ時季の到來に接せざりしものか。蓋し春風飴蕩百花爛熳たるの節に先ち寒威凜烈四顧寂寥たるの時あり且つ又之れに先ちて秋色荒涼乾坤蕭殺たるの季あるは應順の天理なり。皇天上帝は決して眼目の不明なるものにあらず意思の偏愛なるものにあらず。石見人の幸運は專ら之れを將來に置くものに外ならずといふべきなり。然らば則ち今日の石見青年の前途も亦多望なる哉。語に曰はく大器は晩成すと之れを年中の四時に例ふるに現今の石見は恰も秋の如し。乾坤蕭條として人なきか如しと雖他日必ず春光和氣花笑ひ鳥媚ふるの好時季至らすといはんや。石見の地たる既にいへる如く山陰道の極西に位するを以て古來は實に帝國の僻陬なりとて一般人の自ら放棄して顧みざる處となり誠に淺間しき状況を呈じたがしかと今日に至ては則ち然

らざるなり。請ふ看よ征清の皇軍は堂々破竹の勢を以て連戦連勝將に  
 旭旗を北京城頭に翻へし。一大新日本國を建設せんとするにあらずや。  
 此の時に當り我石見の地は如何。韓國と隔つる所のものは只一葦の帶  
 水のみ片々たる葉舟に於ても當さに日を経すして達すへし。重大の關  
 係を有する智者を俟たすして知るべきなり。嗚呼多望なる哉石見青年  
 諸子好時季は來りつゝあるなり  
 少しく翻へりて之れを想ふに木石ならぬ石見人は決して此好時季の  
 至れるを知らざるものにあらず。已に之れを知るか故に専ら力を殖産  
 興業に致し或は紙質を改良し或は米作に注意し或は養蠶業を振はし  
 製絲業を盛にし或は鑛業漁業を奨勵し汲々として國家の富源を開か  
 んとするは眞に將來に有する希望を充たさんとするに外ならず。然れ  
 ども事皆緩漫にして概ね其の志望を全うし得べきにあらず。苟も此の

大志望を遂げんと欲せば必ず堂々たる破天荒の事業をなすを要す然  
 らずんば焉を其功を奏するを得んや。蓋し是等の事たる吾人を以て之  
 れを見れば已に反復陳述せる如く彼の老成者流の決して能すべきの  
 事にあらず必ず有爲青年に依らざるへからず。且つや時季至るの曉に  
 於て専ら幸福の眞味を極むる者は獨り今日の青年にして彼の老成者  
 流に至ては如何程今日に刻苦するとも恐らくは是れ化野の露鳥部の  
 煙たるへければ其奮發力の乏しきも亦宜なりといふへし。是れ實に青  
 年諸子の前途愈多望なる所以なりとす  
 石見青年の前途や眞に多望なり。從來石見の社會は専ら  
 封建の餘弊を受けて萎靡荒廢甚たしきを極めたりと雖文明の德澤漸  
 次に普及し來り一步又一步にして進歩の緒將就かんとす。豈祝すへき  
 の至りならずや。此の時に當り宜しく諸子か固有の長所たる磊落活潑



の精神氣力を注ぎ驟然として立つ所あらは革新の事業は駭々乎として其の安を進むるや必せり。若し夫れ内地の開鑿日進月歩益青雲の季に達し廣瀆鐵道落成を告げ韓國貿易港開設せらるゝに及び中國の物貨悉く我石見に集り來り開明の聲洋々たるに至れば社會の光景果して如何そや。而して此の社會に立ち揚々然として驅馳奔走する今日の石見青年諸子の心事果して如何そや。要するに石見青年の前途は恰も旭日の東天に昇るか如し歲月至るに従ひ光明愈赫々として青空の絶巔に近きつゝあるを覺ゆ。春曙風輪に淑氣霑々櫻桃水暖に鳥語啾々山青く水清きは眞に是れ絶巔の光景か。嗚呼樂ひ哉。

然りと雖此に又最も注意せざるへからざる一大要件ありて存す。諸子知らずや蕭殺たる秋季と聆蕩たる春季との間には必ず寂寥たる冬季あることを。諸子の前途中最も困難なる者は好時季に至る迄の中間に

存する所の苦境なりとす。諸子苟も將來の好時季に處し人間終局の目的を達し圓滿幸福の興味を極めんと欲せば必ず此の苦境を経ざるべからず。既にいへる如く石見社會現今の状況は恰も秋季の如きなり。春季に至るには必ず中間の冬季を経ざるべからず。冬季とは何そや。曰く革新の事業の最も困難なる時季之れなり。請ふ眼を放て社會の光景を觀よ。萬端革新の事業是れよりして愈困難に赴かんとするにあらずや。嗚呼親愛なる諸子よ。前途極めて多望なるを知らは冀くは精勵刻苦して以て巧に此の苦境に處せよ。否らされは決して好時季に至らざるなり。西哲曰く艱難に遇はざるは人の不幸なりと思はざるべからず。若し夫れ革新の事業全く其の功を奏し苦境初めて去るに當てや青空の絶巔に達せしなり。永年の志望則ち叶ひしなり。清爽明媚燦然爛然日麗にして風温なり。嗚呼多望なる哉。石見青年の前途や實に旭日の東天に昇

るが如し。高津嶺の雪。蟠龍湖上の月。斷魚溪涯の花。眞美極麗。千秋盡きさるなり。三瓶岳。石見瀉。高峻絶清。萬世變せざるなり。

第七章 石見青年の大責任

吾人前を述ぶるか如く諸子の前途は極めて多望なり。石見は今や諸子に向て待つ所多し。斯くの如くんは諸子の負ふ所の責任亦大なるは當然の條理たり。故に吾人は今是に聊か之れを論じ諸子の確乎たる決心を惹起し諸子と共に之の大責任を盡さんとす。諸子は一知半解以て此の責任を免れんとするや。奮起せよ青年諸子。今は泰平を謳歌すべきの時にあらず。悠々緩々夏の夜の短かきを憂ひ春日の長きを忘るゝ時にあらず。奮起せよ青年諸子。吾人は諸子と共に之の大責任を盡し新石見を繼續し今日以後の日本歴史に於て特筆大書せしむべきなり。奮起せ

上青年諸子

凡そ世間人の以て恐るべしとなすもの固より一にして足らずと雖吾人を以て之れを見れば責任を知らざるより重きはなしと信す。亞弗利加の蠻民若くは南洋の食人種彼等未だ責任の何ものたるを知らざるなり。故に淺間しくも眞に見るに堪えざる不幸の境遇に接するなり。然りと雖是れ尙ほ恕すべし。自由の空氣を呼吸し天賦の權利を享有する今日の青年にして尙ほ其の負ふ所を知らずんは吾人豈之れを黙黙の裡に宥すべけんや。然るを況んや前途極めて多望多福なる今日の石見青年をや。看よ責任を知らざるの天刑は已に晁錯に下されしにあらずや。鑑むべきことにてこそ。夫れ責任なるものは人の受くる所の自由に關するなり。盲者は眼に就て責任を有せず。啞者は口に就て責任を有せず。蠢癡白痴のもの固より

責任を有せざるなり。熟は接するに石見今日の老人は舊社會の人にして新社會の人にあらず。されは石見國に於て責任を負ふものは寧ろ春秋に富める多望の青年にあらずや。吾人嘗て「平民のめさまし」を讀みしに

我日本も徳川の頃迄は封建の世といふて諸大名か國々に城下を構へ家老は代々家老に平士は代々平士に百姓商人は代々百姓商人と定まりて馬鹿であらうと利發であらうと物識にせよ文盲にせよ其の邊の事は少しも構はざりし故家老や平士や百姓商人の中にも勇氣が強いとか智慧が多いとか何か人並に勝れた人物は常に物々不平を極めて居る中に歐米人が遣つて來て經濟の理といふて自國の品物の中にて餘れるものは他國に其の代りに他の珍らしきものを取り歸りて相互に便利を圖らうとする幕

幕府の役人共は唯家柄斗ふぞ老中とか若年寄とかの重役を勤め居たる事故目先は少しも見へず(中略)つまり伏水の戦にて徳川氏は敗北して王政維新の御政治となれり然るに諸藩の豪傑達は最初には外國人を打ち攘はねはならぬ杯ひしめきしか根か目明きの腹黒なる故にとても今の日本は外國と戦は出來ぬ事と早くも悟り徳川氏に倍を掛けて交易を成長し其の上にもくく西洋各國の風を見習ふて政治方向萬端追々改まり士族平民の差別はあれども唯名目計にて外にも何にも上下尊卑の等級もなく士族にては馬鹿なれば車を挽き平民にても惠智學問かあれば總理大臣ともなれる姿とはなれり  
是よりして文運の度實に飛流直下の勢を以て進歩し來り萬機公論に決する誓文となり廢藩置縣の制となり廢刀令となり徴兵令となり

民選議院の建白となり立憲自治の大詔となり地方官會議となり府縣會の設立となり町村郡區の自治となり國會開設請願となり政黨團結となり次きて憲法發布となり國會開設となり今や日清開戦となりて將に東洋の局面を一變せんとす。今日の石見青年諸子此の好運の期に遭遇し甚だ多望なる前途を有す。諸子の負ふ所重大なる決して偶然にあらざるなり。然るに諸子斯くの如く自由の空氣を呼吸し天賦の權利を享有し天保老人の當時と大に異なるか上に前述の如き多望なる前途を有しなから平然として慮る所なきか如きは吾人實に解する能はざる所なり。

吾人は尙ほ一步を進めて之れを論せん。今日の石見は青年の石見にして老人の石見にあらざるなり。何となれば彼等は専ら舊社會の人にして唯餘生を新社會に送るのみ。僅かに石見を以て吾人青年に繼續せし

めんか爲めに存すといふも不可なきなり。彼等の責任たる寧ろ舊社會に存して新社會に於ては殆ど負ふ所なし。石見社會今日の狀態を目して一に之れを老人に歸するは實に其の當を得ざるものなり。然るに今日青年諸子か萬事を舉げて之れを老人に放任せんとするか如きは果して何故そや。之れ吾人をして再び解する能はざる所なり。只竊かに天刑の下らんことを恐るゝのみなり。

石見青年諸子よ冀くは少しく察する所あれ。諸子知らずや已に吾人か述ぶるか如く石見社會に於ける數多の事業は頻りに諸子を待つなり。商業に工業に航海業に蠶業に水産業に石見の地石見の海常に諸子を待てり。豈啻生産的の事業のみならんや教育に宗教に或は道義に吁萬事は皆な諸子の革新せんことを待つ。革新なる哉嗚呼誰か能くこの大業を終るものぞ。吾人は諸子と共に精勵刻苦して以て社會革

新の責を擧げんとを期す。石見青年の責亦大ならずや。夫れ然り諸子已に此の大責任を負ふ。焉能く之れを知る所なくして可ならんや。焉能く之れを盡す所なくして可ならんや。蓋し責任なるものは已に受くる所或は將に受けんとする所の自由の結果にして其の報酬として必ず免るへからざる一個の制裁なり。人たるもの此の制裁の範圍内に於て動き以て安全に其の地位を保持し得へし。然るをもし其の受くる所の自由に報酬を與へずは苟も癡癡白痴ならざる限りは即ち天地に容れられざる大罪人といふへし。然らば即ち石見の繼續者たるべき青年諸子に取りては革新の事業は免るへからざるなり。否諸子の好んで欲する所なるへし。責任已に重大なり。吾人の抱負も亦大ならずるへからず。何のそのいはをも透すめずさ。可奮起せよ。青年諸子。今の時に於て社會を革新するなくんは將た何の時をか待たん。且つ夫れ如何にして此

の大責任を遂ぐべきかは請ふ吾人をして後に之れを論せしめよ

### 第八章 石見青年處世の方針

吾人嘗て船上にありて有難に蜿蜒たる石雲兩州の諸山を望みつゝ清波を蹴て松江に到り漂渺たる宍道の湖水を渡りて杵築の大社に詣て雲州一帯の平原を直線に横きりて石見に入り或は崎嶇たる山路を踏て斷魚溪を賞し茫洋として嶮岳峻峯の間を貫ける江川を下り或は輕裝行脚漂然として水を渡り山を越へ中國の浪華と稱する廣島に到り山紫水明の嚴島に遊ひ悠々備後に入り或は長航波を破て鎮西に到り夥多の名所舊跡を遊歴せるの後左右前後に四國九州及防長の諸山を眺めつゝ三田尻に航復等しく山川を踏み山口を経て歸郷したり。嗚呼處世も亦是れ旅行の如きか渺たり漠たり決して界限あらず若し夫

れ一たび其の方針を誤るに當らば則ち逡巡躊躇進退谷まり茫然として自失するは蓋し世態の常たり豈に察せざるへけんや

石見六郡の地は悉く吾人足跡の到る處なり。去れば畧ほ土地の形勢社會の状況等を實視せるの上聊か他隣國と比較して彼我の間に存する萬般の差異を解得する所なくんはあらず。乃ち知る石見の地や廣大無邊山秀て水流れ自ら天然の産物に豊富なるのみならず位置に於て實に將來一般人が大に注目すへき重要な場處を占むることの偶然にあらざるを

然らば則ち此の良土に生活して和樂の世を送らんとする有爲の青年志士たる必ずや確乎たる方針を取りて動かす扁に世路を誤まることなきを要す

吾人既に石見青年諸子の責任極めて重大に前途極めて多望なること

を論したると同時に完全に之れを遂げ完全に之れを超ゆること。至て困難なることを説きたり。故に今此の困難の場裡を進行して専ら過失なからしめんか爲めに明々に諸子か處世の方針を方定するは眞に是れ吾人の一大責任たりとす

革新の事業は有爲活潑なる青年の力に依らすんは到底望みかたきとは既に反復論述するところなれば今更喋々を要せざることならん是に少しく言はざるへからざるものあり。他にあらず我石見は土地廣く産物に富み且つ重要な地位を占むれども惜むらくは他隣國に比し遙に劣る所の天然の一障害のあるあり萬端是れか爲めに徒らに天産利用の路を塞ぎ従て土地の基本財を造ること能はず以て革新の事業自ら遅々として進まざるが如きもの眞に遺憾の限りなりとす。抑も此の天然の障害といへるは全土概して山多くして且つ峻く平地極めて

少く到着處崎嶇として諸般の事業を行ふに不便なるに在るなり。然らば則ち革新の事業を遂げんと欲せば先づ須く人爲を以て此の天然の障害を防ぎ以て土地の基本財を造ることを勉めざるべからず。蓋し東にも角にも將來望みあるものは實業なり内地の開墾未だ宜しきに達せず交通の路自ら全からずと雖専ら實業を勵み着々基本財を造る傍之れを資として以て開墾の事業を行ふは大に策の得たるものなり。去れは此の廣大なる土地は日進月歩實業の光を放ち非常に國家の富源をなすことは吾人の保證する所なり。然り而して我石見は氣象宜ろしきに適ひ水且つ清きを以て養蠶製紙の事業は大に望みあるものなるべし。尙又北面一帯海に沿ふを以て漁業の利益し淺少ならざるべきなり。恐らくは異日必ず石見富源の首坐を占むるものは此の二者ならんか諸子實くは勢力せよ

夫れ石見革新の事業は一に物質的にのみ止まるものにあらず精神的の革新も亦大に施さるべからざるものあり。以上述ふるところは専ら物質的革新にあれば請ふ是より進んで精神的革新に就て述べん。蓋し石見人は吾人之れを前に言へる如く極めて誇るべきの長所を有すと雖同時に於て非常に耻つべきの弱點を有す而して萬事是れか爲めに制せられ決して回天の偉業を成功する能はず徒らに他國の後尾に墮若たるの已むを得ざるものは眞に千歳の遺憾ならずや。去れば宜ろしく今日に當り層一層長所たる美德を章表する上に宜ろしく不羈獨立の精神思考觀察の念慮一致團結の思想及び堅忍不拔の氣力を抱持して専ら事物に過失なからんことを勉め而して又十分に進取の氣象を養はざるべからず。儼ふに石見革新(物質的)の事業概ね遅々として進まざる如きものは又一に一般人士凡て進取の氣象なきに由るものと

言はざるへからず。故に能く之れを思ひ之れを察し整々堂々として随分冒險的の行爲をも甘んじて爲す所なくんはあらず。要するに物質的革新の成らざるは之れに先ちて精神的革新の成らざるに在りと言ふべし。可なり。去れは宜ろしく實用教育殊に精神的教育に注意して精神界を一洗するは石見人士眼前の急務なり。

之れを總ふるに現今の石見は革新の時期なり。故に事々物々悉く革新的の精神を以て動き確固不拔能く志を一途に注ぎて直進直行するは石見青年諸子か此の社會に立つに當りて必ず心肝に銘せざるへからざる要件たり。而して革新の事業は専ら電火的に行はざるへからず。獻身的に行はざるへからず如何なる外界の刺戟に遇ふも決して屈することなく斷々乎として猛進すへきなり。斷して而して之れを行はば鬼神之れを避くといふに非ずや。若し夫れ石見青年諸子常に此の方針を

取りて世に處するに當ては固有の本領の向ふ所天下に敵なく石見の社會は必ず血あり肉あり旺然として活動すること決して疑ふへからず。望むらくは石見青年諸子よ終始一徹斷して此の方針を變ずること勿れ。

吾人請ふ是れより諸子か此の方針を取りて世に立つに於て深く注意すへき最大の條規を摘録せん。

第一。事を爲すに當ては必ず其の初めを慎むべし。若し一旦最初に於て失敗する時は終身之れが爲め防くへからざるの禍害を醸出し後悔及はざるに至るへきを以て宜ろしく先づ黙坐三省して將來起るへき百般の事情を洞察し豫め之れに對する所の覺悟を定めたる後始めて事に赴くを要す。

第二。既に決する所の事物は如何なる場合たりとも決して中途にし



て廢すべからず蓋し初めに輕々事を興し忽然其の難きか爲めに己むを得ず放棄して顧みざるは石見人の通弊たり宜ろしく猛然雄進して徹頭徹尾之れを貫がざるべからず

第三 君子重からざれば威あらざるなり常に能く自重の精神を存し浮薄の心を除去し専ら品格を高尙にして世俗の摸範となり舉止進退せざるべからず決して由なく他に膝を屈し一般人士に輕視せらるゝか如きことなきを要す

第四 互に相愛し提携して事を行ひ以て利害を共にせざるべからず若し夫れ各自悉く己れの欲する所を行ひ一向他人の運命如何を顧みざるときは如何に社會の進歩を望むも豈に得べけんや同心協力は蓋し愛國心の基礎なり

第五 常に徳行を脩め誠正にして信實に決して自他を欺くべからず

憶ふに天下何人と雖人より欺かるゝを快しとするものあらんや然りと雖人より欺かれざらんことを冀はゝ先づ己れより人を欺くことなからんことを要すべきなり否らされは決して人より欺かれざらんことを望むべからず宜ろしく忠直謙謹人に愛慕せらるゝことを勉むべし

第六 疾く財用を節し奢侈逸樂を極むることなく専心一意資産を貯蓄し國利民福を計るべし

以上は唯だ概略に過ぎず又奇説にもあらず卓論にもあらず實に平々凡々たり然れども此の平々凡々こそ却て處世の秘訣なり而して實は是れ既に反復陳述し來れるものにして自ら重複の觀なき能はずと雖特に此處に於ては處世上の注意として一括して明らかに之れを録するのみ行路難行路難誰か行路難を歌はざらんや

第九章 立身の要訣を説きて石見青年に望む

大丈夫生を天地間に有する以上は宜ろしく立身行道以て人間終局の目的を達し圓滿幸福の興味を極む可きなり。豈に空しく土石草木と共に朽ち去るへけんや。見るへし彼の滔々たる水流其の最初に當てや源泉混々として溪谷を出て激して奔湍となり懸りて瀑布となり流れて河となり瀬となり淵となり屈曲彎流千變萬化實に極りなし。雖不挫不撓晝夜を捨てず遂に廣大無邊の大海となるにあらずや。人亦之れと同じく決志雄奮一意専心其の定むる所の標準に向ひ直進直行して怠ることなきに於ては必然其の志望を達し得へし。陽氣發するを以て金石亦磨る諸子夫れ之れを思へ。有爲多望なる石見青年諸子よ苟も立身行道以て永遠の大計を立てん

と欲せは宜ろしく先づ積年傳承し來れる所の弱點を矯正することを勉むへし。然り而して其の術之れを他に求むるを要せず蓋し此の如し

(一) 不羈獨立の精神を固めんと欲せは必ず依頼心を去るへく  
 (二) 思考觀察の念慮を強めんと欲せは専ら輕々しく事に赴かざるを要し  
 (三) 一致團結の思想を備へんと欲せは宜ろしく相互の氣脈を通すへく  
 (四) 堅忍不拔の氣力を養はんを欲せは須らく難苦に屈撓することなきを要す

へし吾人の執る所は是れのみ。然りと雖翻て按するに此等の事たる固より至大の難物に屬し決して容易に行ひ得へきのことにあらざるは勿論なりとす。然らば則ち如何に處して可なるや他なし他なし。諸子請も問ふを休めよ。此の時に於てこそ始めて青年固有の本領は要せらる。なれ難事は固より難事なりと雖精神一到何事か成らざらん吾人乃ち緒論に於て百難屈せず萬苦撓まず一搏して天下に雄飛し苟も素志

を達するにあらざんは寧ろ斃れて而して己むの大精神は之れを進歩的献身前の青年を措きて將た誰に向て求めんと絶叫せしもの何そ夫れ無用の言ならんや冀くは宜ろしく固有の本領を發揚せよ。而して既に其の本領を發揚し傳承の弱點を矯正し得は意氣自ら磊落となり身一點の苦慮なく加ふるに本然の美質あり専ら自由自在の行をなむ得へきに由り漢乎たる氣力を以て扁に精神の脩養を勉むへし。ギスレリトは教へて曰く「偉大なる思想を以て汝の精神を養へ英雄となりんと欲するは即ち英雄となるの階梯なり」と。精神の修養蓋し一日も忽にすへからざる知るべきなり。夫れ精神の脩養を勉めんと欲せば必ず其の修養の標準を定めざるべからず。而して脩養其の宜ろしきを得處世接物に適應すべき確乎たる定見を立てんと欲せば必ず終始一徹其の標準を變せざらむことを要す。何をか精神修養の標準といふ曰く師

即ち是れなり。唐の哲人は曰く「師は道を傳へ業を授け惑を解く所以なり」と。若し夫れ精神脩養の標準たる師を變するに當ては即ち自ら道を傳ふるの標準變し業を授くるの標準變し惑を解くの標準變し遂に萬般の標準悉く變すへし。斯くの如く變し來れば人たるもの徒らに首鼠兩端逡巡躊躇し進むに路なく退くに處なく進退谷まり茫然として空しく五里霧中に彷徨するに至るへし。何を完全の脩養を遂くへけんや何を確乎たる定見を立つるを得んや。脩養既に遂けず定見既に立たず事に接し物に處し百失百敗一の成す所なく徒らに土石草木と生を同ふし無用の長物となること。是非なきを如何せん。夫れ精神脩養の術は教育にあり賢愚得失の分るゝ所一に教育の宜ろしきを得ると否とにあるものなれば教育の大本として須く精神の修養を勉めざるべからざるは最早吾人の喋々を要せざるのことなから

熟ら目今の世態を觀するに大に表裡相合せざるの甚たしきを悲ますんはあらず。今日の錚々たる諸學校たる其の教師なる人々概ね皆數年を出てすして更迭せられざるはなし否一般の教師は先づ可なり。然れども之れが主宰たる學校長其の人の常に更迭せらるゝに至ては學生たる者因て以て精神を培養すべき標準常に一定することなきを以て、遂に一の定見を立つることなくして已むに由り有爲なる人物となる能はざるを比々として皆然りとす。而して吾人は私立諸學校よりも特に官立諸學校に於て其の然るを見る。是れ他なし私立學校は官立學校に比し校長の更迭遙かに少きを以てなり。蓋し官立學校の卒業生に字書然たる博學の士ありと雖概ね皆活用に堪へざる無氣骨者流たる偶然にあらざるべし。官立學校は暫らく之れを措き私立學生に就て能く能く之れを觀るに福澤其の人の自ら教授を勉めし頃の慶應義塾學

生と其の已に老衰し他人を以て教授せしむるに至りし今日の慶應義塾學生とを比較すれば其の精神氣力眞に雲泥の差異あるを覺ふ。而して新島其の人の在世間の同志社學生と其の歿後たる今日の同志社學生を比較するも亦然りとす。今日兩種の新人物として社會に立てる幾多の青年志士中實際に世道人心を稱するもの極めて寥寥たるものは抑も所以あるなり。去れば吾人の望む所は官立と私立とを問はず校長たる其の人成るべく十分なる選擇を経たる人物に就き永年の職務を授け決して之れを更迭することなきに存す。果して然らば責任の歸するをどろ一に其の一身に在るを以て其の人亦決して職務を忽にせず好其の人物を造り出すを期して待つべきなり。古の英雄傑士感化力の注ぐ所能く其の門下に於て卓犖の人物を出したる例證は章々乎として史上に見ゆ實に是れ移して以て今日に行ふべきの最大方便にあら

すや、然りと雖斯くの如き議論は實際いふべくして行ひ難きものならん。故に只一個の意見として之れを存し立身の要訣を説くに當りて必要な點のみを陳するに止め是れより少しく立脚の地を轉して立身行道の冀望を全ふすへき精神脩養の方策を他路に求めんに大凡人たる者完全に精神の脩養を遂げんと欲せば必ず先づ自ら動くべくして他に依頼することあるべからず。立身行道の冀望は一に自己の冀望にして他人の冀望にあらず故に己れ自ら動くべきは是れ理の當然なり。若し夫れ自己なる觀念なきに於ては教育如何程宜るしきを得ると雖決して其の効果なかるべきなり。自己なる觀念を立てしむるも教育の術に存すれども本意に論ずる限にあらず。去れば録々たる今日の諸學校固より重要な點に於て欠くる所ありと雖覺悟して向ふに於ては必ず完

全の脩養を遂げ得べきや決して疑を容れず。然らば其の覺悟とは果して何ぞや他なし。心中必ず先づ自己なる觀念を立つること。是れなり。既に自己なる觀念立ち萬事皆己れの爲めにするものにして人の爲めにするものにあらずといへる精神備はるに於ては何ぞ他物に侵さるゝの理あらんや。

夫れ自己なる觀念立たは必ず精神脩養の標準を古人に求むべし。即ち古人を師として脩養を行ふべし。然らば其の標準常に一定不變にして其の意を得ることを願ふ大なりとす。而して其の人物の選定に就きては吾人は成る可く左の制限を以て諸子に諮らんとす。

第一必ず日本人たるべきこと

第二成るべく無欠點の人なること

第三充分事跡の顯はれたる人なること

第四成るハ著書言行録等ありて主義精神の能く表明せられたる人なること  
 第五凡ての點に於て國民の好模範として許すべきの人なること  
 即ち是れなり。然れども斯くの如きは眞に理想上の人物に屬し必ずしも一の違背なからんことは到底望むべきにあらざるか故に成るべく之れに近きものを求めれば可なり。去れば其の人物たる古人中一にして足らずと雖吾人は吉田松陰其の人を以て至極適當と信す。何となれば今日の石見は革新の時期にして特に此の種の人物を要すへければなり。況んや各人悉く此の人に同化するに於ては日本國は永く東洋に雄視するを得るのみならず猶ほ進んで歐米各國を凌駕し能ふべきに於てれや。夫れ人物の選定已に成るに於ては宜ろしく之れに由て自己の主義精神を規定し一意専心其の人物と同化せんことを勉むへし。青

年の本領の向ふ所何を冀望の全からざるを得んや  
 然り而して既に其の主義精神を規定せる上は該人物を中心とし廣く内外に亘りて同臭味の人物を求め一々細密の觀察を下して其の爲人を明かにし棄つべき所を棄て取るべき所を取り以て脩養の資に供するか如きは大に策の得たるものとす。要するに精神の脩養は立身の基礎にして必ず第一着に之れを勉むへく之れを勉むるには終始其の標準を變せざるべく標準を變せざるには必ず之れを古人に求めへく既に之れを求め得は宜ろしく由て以て確乎なる定見を立つるを要すへし。定見既に立つに於ては堂々たる今古の英雄傑士と雖悉く是れ眼中兒たみに過ぎず剛毅凛然卓犖嶄然宇宙を統命して一丸となし揚々自得懼る所なし驚天動地の偉業電光石火の活劇も之れを行ひ之れを演ずる何の難き所あらん

立身の基礎既に成る然る後は如何すへきや。之れを東湖に聞くに曰く「自古稽今、發明真正之大道、有文尚武、鼓舞天地之正氣」と吾人何ぞ蛇足を翻ぶるを要せん只夫に注意すへき一事あるのみ。他にあらず小事を忽にせざることも是れなり。請み看よ彼の巍々たるエペレストの高峯其の能く天雲を凌ぐ所以のものは果して何故ぞや彼の洋々たるアマゾンの大江其の能く漢陸を貫く所以のものは果して何故ぞや。其の初めに當り片々たる土壌をも決して之れを讓ることなく涓々たる細流をも決して之れを擇ぶことなきにあらざるよりは焉を能く世界に鳴るを得んや。青雲の計は決して偶然に至るへきものにあらず必ずや致々汲々粉骨靡身の難を經るを要す。故に人たる者宜ろしく常に小事を忽にせず歩々行々を以て事を運ぶべきなり。

石見青年諸子よ吾人の以て立身の要訣なりとするものは實に以上の

如し而して是れ皆實行し得べきことなり。吾人竊に怪む何故に諸子は之れを實行することを厭ふかを誤解する勿れ吾人の所謂立身なるものは英雄となるの謂にあらす豪傑となるの謂にあらす専ら國家有要の大物となるの謂ひなり。望むらくは諸子よ石見の爲め國家の爲め又自己一身の爲め宜ろしく之れを實行せよ而して人間終局の目的を達し圓滿幸福の眞味を極むる所あれよ。彼の倫安姑息なる天保老人は兎も角も活潑敢爲なる諸子に於ては何ぞ其の冀望を全ふすること能はざるの理あらんや。

第十章 結論

青年重不來回顧すれば人生は瞬時たり烏兔匆々一たひ去りて復歸らず何ぞ夫れ人を待つの暇あらんや。蓋し青年は人生中最も前途多望な

るの時季なり一世の大計を決定する所にして若しも一旦此の季を空  
 多の有望なる青年輩其の初めに當てや實に凜然當るへからざる鐵石  
 の心腸なるも忽焉として楊柳一般の魂魄と化し去り悠々閑々貴重の  
 歲月を徒費して顧みず遊息安逸の極遂に一世の大計を誤り土石草木  
 と一様の生を送るもの擴張觀し來れば比々として皆然らざるはなし  
 之れを想ひ之れを察し誰れが長嘆太息せざらんや  
 吾人上乘數輩を重んじ論じ來るところのもの全く親愛な  
 る石見青年諸子をして偏に此の好時季を空おすることなからしめん  
 せざるの微志の如何を好んで無用の文詞をなすものならんや今茲に  
 全編の大意を拈んで吾人の眞精神を明かにし以て本論の結局を告  
 げんは我石見地蔵主といひ物産といひ總て其の宜るしきに適ひ大に

將來有爲なる地たるべきや決して疑を容れざる所なりと雖如何せん  
 冷血に於ては種々の事情に障害せられ百事萎靡して振はず遂に天賦  
 の眞土たるの實を擧ぐることも能はざるより眞に千載の遺憾なれ抑も  
 此の事情といへるは實に二大原因の在りて存するを見る則ち地勢崎  
 嶇にして諸事業を行ふに不便なること教育不完全にして人物なく且  
 つ國人非常なる弱點を有して事の成功を見る能はざることは是れなり  
 然りと雖原因斯くの如し豈に之れを挽回するの道なからんや須らく  
 教育(特に精神的教育)を隆に且つ完全に託て國人の弱點を矯正し大に  
 其の長所を發揚し以て有用の眞人物を養成し活社會成立の基礎を作  
 るべし然らば則ち社會革新の事業は立處行はるべきなり且つ夫れ  
 地勢如何の如きに至ては容易く人力を以て満足すべきの關鑿を行ひ  
 得べし何の憂か之れあらん夫れは吾人の素志は他ならず此の有爲な



る土地に生活する所の有爲なる人士をして各其の盡すべきの天職を盡さしめ以つて國家に對するの責任を遂げ立憲國民の大義務を全ふせしめんとするにあるのみ。然りと雖翻て按ずるに今日の石見は青年の石見にして老人の石見にあらず故に此の任に當るべきものは自ら今日の青年にあるを以て必ずや之れを有爲多望の諸子に望まざるべからず是れ吾人か特に本論をなす所以なり石見青年たる者何ぞ奮發興起する所なくして可ならんや。請ふ銳眼を開きて石見社會の狀態を熟視し須らく原因結果の條理を識認せよ諸子は宜ろしく當に石見社會の萎靡は人物なきに由るものなることを看破せざるべからず教育の不振は當任者の不熱心に由るものなることを察知せざるべからず石見人の弱點は決して之れを傳承すべきにあらずることを解得せざるべからず石見人の長所は決して之れを放擲すべきにあらずることを

を懸念せざるべからず。然り而して已に原因結果の條理を識認する以上は宜ろしく一舉じて社會の形勢を挽回し革新の事業を成就せざるべからず。諸子の前途は多望なり諸子の責任は重大なり宜ろしく確乎たる方針を規定して世に處するを要す。諸子の地位は重要なり諸子の境遇は多難なり宜ろしく嚴然たる基礎を建設して物に接するを要す。諸子なくんは石見の社會は則ち死すべし石見の元氣は則ち消ゆべし至誠至直仰て天に愧ちす俯して地に慚ちす青年の青年たる真相を保持するは眞に是れ諸子の本分にあらずや。然るに吾人は熟ら諸子現今の一舉一動を注視するに當り未だ曾て此の點に於て甚だ冷々たるを嘆せずんばあらざるなり。愛郷の心極めて徹々にして石見の觀念に至るには毫も存するなきか如きは何事ぞ無精神なるにも程こそあれ斯くの如くにして如何ぞ多望の前途を誤らざることを得んや。冀くは猛省

守る所あれ宜るしく固有の特性を發揮し偉大なる思想を以て専ら精神の修養を勉め磊々落落光風霽月の如くなることを期すべし。宜るしく固有の本領を章表し凜乎たる氣力を以て須く遠大の志望を立て整々堂々激波昂濤の如くなることを期すべし。精神一到萬事悉く成就す立身の道豈に他あらんや人間終局の大目的を達し圓滿幸福の眞味を極めまかじ。記憶せよ。行ふに道を以てせば石見の社會を革新するは決して難きはあらざることを。一旦時期の到るあらば石見の社會は恰も黃鳥の幽谷より喬木に移るが如く汚濁し腐敗せんとする社會は忽ち化して水聲山色悉く活氣を帯ひ鳥獸草木悉く麗容を呈し八面玲瓏の美觀は既に眼前に活如し來らん快なる哉。

今將に本論を終るとするに當り吾人は特に諸子に向ひて一言せざるべからざる要件あり他にあらず諸子は之れを彼の老人者流に比し

薄かば小膽なること是れなり。知るや知らずや封建の世に在ては士氣一般に激昂し大膽不敵の志士は實に雲の如く雨の此く決して慷慨悲歌の士尊攘論者の徒のみにあらずしことを。一片節義心の凝固する所單身靈鎗を杖て雲霞の大敵に當り從容自若として硝煙彈雨の間に斃れたる岸靜江其の人の如き渡邊其の人の如き決して一兩人にあらずるなり勢運の然らしむる所とはいへ眞に天晴の膽力にあらずや諸子此れを思ひ果して如何なる處かある。此の如き社會に於て人とならば今日の大先輩か案外にも剛放なる膽力を有する蓋し偶然にあらずるなり。而して今日の如きは別して膽の大なるを要すべき時勢にあらずや諸子宜るしく之れを思ふべし。

これに要するに我石見現今の社會は決して満足すべきの社會にあらずるなり。必ずや奮發して以て革新の實を擧げざるべからず而して苟

も革新の實を擧げんと欲せば必ずや非常なる屏置を斷行する所なく  
 九はあらず。吉田松陰曾言く時へるごとあり吾雖微賤亦望國之民也深知  
 趨勢所以然義不忍顧情身驟然坐視不思報皇恩也と嗚呼何ぞ進歩的な  
 る何ぞ獻身的なる青年の青年たる所以實は此に存するなり親愛なる  
 石見青年諸子か今日に於ける一身の地位境遇たる亦同じく自ら此の  
 精神ならずんはあらず。有爲多望の諸子焉を奮起せざる焉を奮起せさ  
 るる若くは愛國の心なき若くは愛國の心なき若くは愛國の心なき  
 一 少年の熱誠は、大體、愛國の心なき若くは愛國の心なき若くは愛國の心なき  
 一 少年の熱誠は、大體、愛國の心なき若くは愛國の心なき若くは愛國の心なき

石見青年論終

明治廿八年五月十二日印刷

明治廿八年七月十五日發行

(定價十五錢)

著者兼 島根縣平民 大谷 暉 男

發行所 島根縣那賀郡周布村大字吉地 百五十五番地

印刷人 久米川 治三郎

東京市芝區南佐久間町二丁目 十七番地

印刷所 國文社 東京市京橋區宗十郎町 十五番地

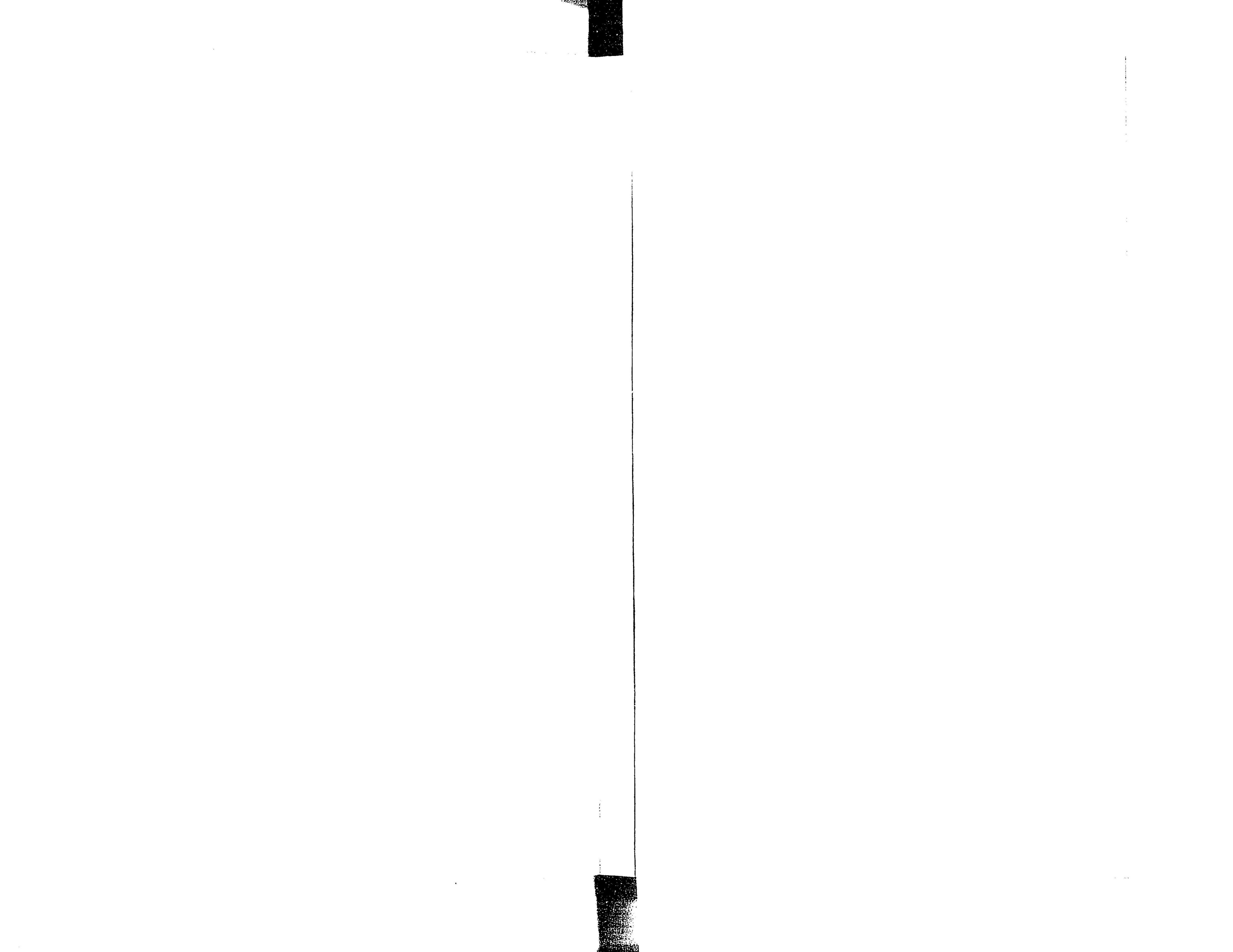


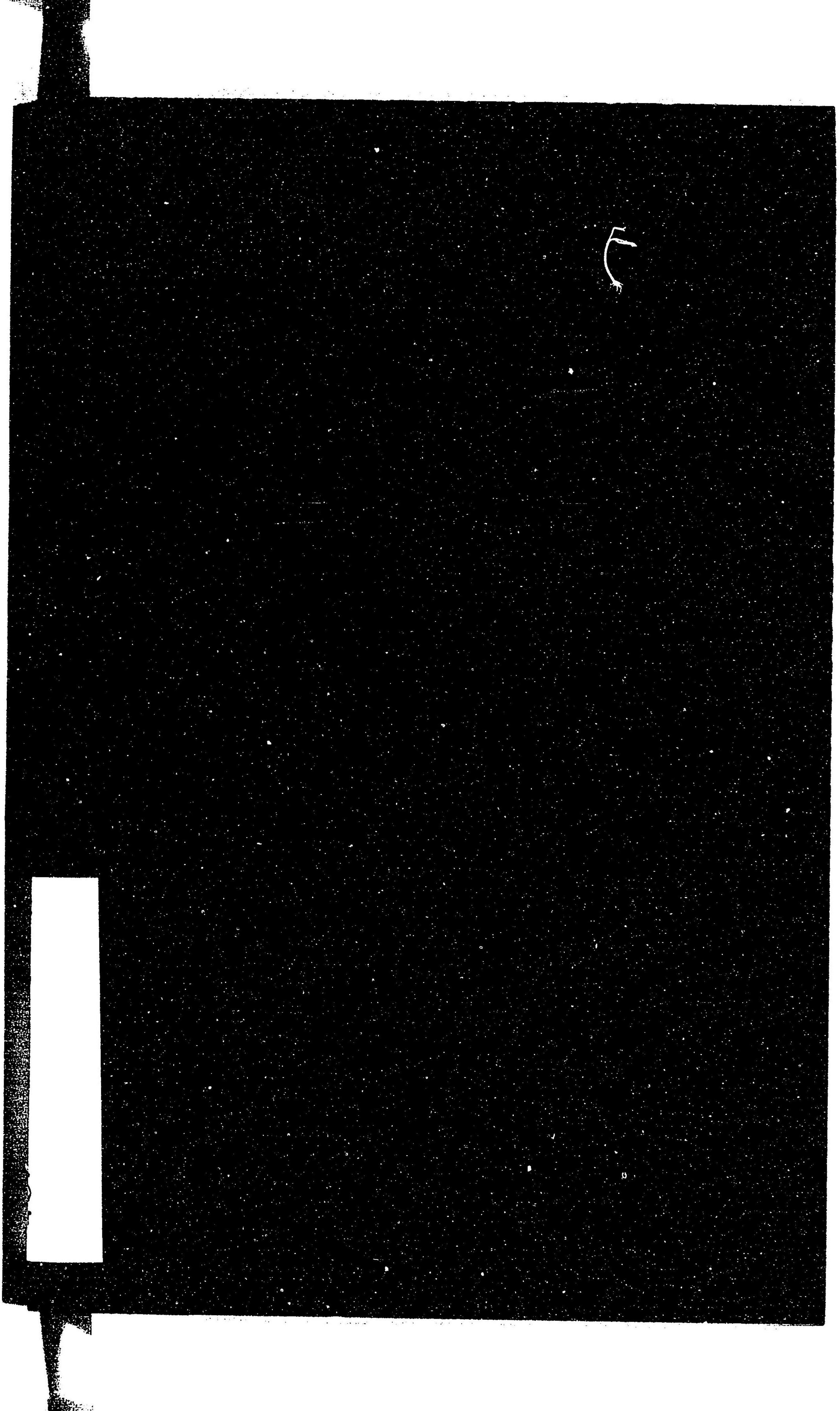
昭和廿一年五月二十一日出版  
昭和二十一年五月二十一日出版

大正  
昭和  
昭和二十一年  
昭和二十一年五月二十一日

### 重なる正誤

- 頁数 訂正  
一八六 國民 人民
- 六〇一 高津樹の書 高津樹の書
- 六二五 平民の目ざまし 平民の目ざましを  
読みし其の中に目へり
- 六三十一 他國に其代りた 他國に其代りた
- 六九五 備載 備載
- 七〇九 備載 備載





[Redacted text]

特46

185

石見青年論

国立国会図書館

039459-000-4

特46-185

石見青年論

大谷 暉男 / 著

M28.7

BDA-0008

